

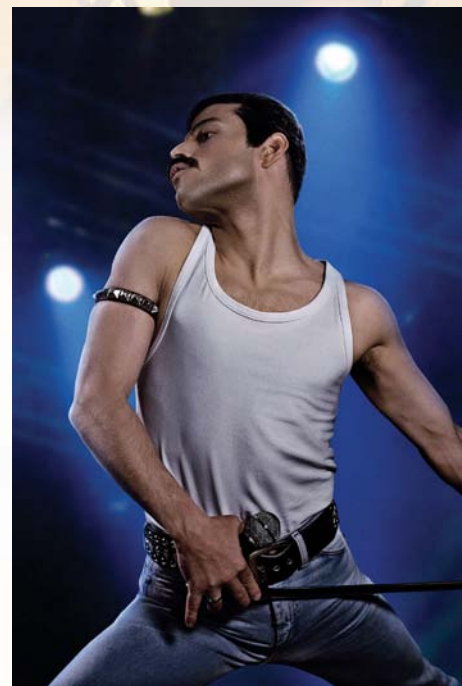


BOHEMIAN Rhapsody

(英・米、129分、2018年10月31日公開)

あらすじ

知人ぞ知る英国のロックバンドQueenを、Freddie Mercury (Rami Malek) の加入した1970年から、1985年のLive Aidコンサートまで魅せる…。



観終わったドイツ人の一人が感極まってか目に涙を浮かべていた…。

主役のRami Malekの熱演と、Bryan Singer監督の繊細な描写により、まるでFreddie Mercuryが蘇ったかのような感覚を得られ、その栄光と影、愛を求める寂しい姿を、バンドのメンバーと共にバックステージから見つめられるのだから無理もないか。

観始めて目が釘付けになったのが、Rami Malekのあまりのそっくり振り、そして歯!

本人は歯についてコンプレックスを持っていた、ということでRami Malekは作り物の歯を付け、歌い、話す。仕草も正にそのもの。とはいえ、ただの物まねではない。Freddie Mercuryの孤独感と悲哀が滲み出ている演技には、Queenのファンでなくても涙を誘われる。

その脇を固める俳優陣も、元祖メンバーのBrian MayとRoger Taylorが直接に、当時を語り演奏指導したことも手伝って、かなり良い味を醸し出している。

Queenファンは賛否両論で、そして、もしファンでなくとも、一人の男の生き様を目の当たりにできる、一見の価値ある1本です。

と、今回はここまで。次回作もお楽しみに。

